

Myanmar

【ミャンマー】

写真・文＝宇田有三（フォトジャーナリスト）

変化の中に
生きる人々



バインジーと呼ばれるポルトガル系の子孫が今も存在する
(ザガイン地域、2007年)



観光客の姿をほとんど見かけることのないダウエイの海岸(タニンダイー地域、2003年)

「最近、大統領と会ったんだ。ところで、この国の昔って、どんな感じだったの？」
私は彼に、北部カチン州で初めて雪山を見たこと、最南端の漁村にはマレー系のバシューと呼ばれるムスリムが住んでいること、青や緑の目をしたポルトガル系の子孫の民族がいることなど、北から南まで、フアインダーを通して見てきたことを話した。私は彼の熱いまなざしを受け、自分のこれまでの経験を、なんとか現地の人々と共有できないかと強く思うようになっていった。

2011年8月、北部の都市マンガレーのインターネットカフェで隣り合った若い男性から話しかけられた。
「どちらの国の方ですか。ミャンマーにはいつ来たのですか」
「日本からだよ。実はね、19年前から毎年、通っているんだ」
「僕が生まれる前からなんだ…」
彼はインターネットそっこのけで、身を乗り出してきた。
「今回はバモーから船で川を下って来たんだ。(アウンサン) スーチーさんの写真があちこちに出回っているけど何が起ったの？」
「最近、大統領と会ったんだ。ところで、この国の昔って、どんな感じだったの？」
私は彼に、北部カチン州で初めて雪山を見たこと、最南端の漁村にはマレー系のバシューと呼ばれるムスリムが住んでいること、青や緑の目をしたポルトガル系の子孫の民族がいることなど、北から南まで、フアインダーを通して見てきたことを話した。私は彼の熱いまなざしを受け、自分のこれまでの経験を、なんとか現地の人々と共有できないかと強く思うようになっていった。

カレン民族の伝統舞踊として知られるドーン・ダンス(カレン州、2009年)



最南端の漁村に暮らすマレー系のムスリム(タニンダイー地域、2007年)



中国国境に近い最北端にはチベット人が暮らす村がある(カチン州、2007年)



エーヤワディー川に水くみに出かける幼い尼僧たち。国民の8割が上座部仏教を信仰する(ザガイン地域、2003年)



テインセイン大統領とアウンサンスーチー氏が会談したニュースを報じる週刊誌。だが、若者はおっぱらスポーツ紙の方に興味があるようだ(ザガイン地域、2011年)



近年、急速に開発が進むヤンゴン(2012年)



今や、このような裏通りでの遊びも消えつつある(ヤンゴン、2002年)



ムスリムは人口の5%ほど。シーア派のムスリムはさらに少ない(ヤンゴン、2010年)

私の手元には、もはやもう二度と撮影できない、軍政権時代の写真が10万枚近くある。軍が統治する時代であっても、たくましく、優しく、したたかに生きた人々の日常を写したものだ。民政移管した今、あの時代の風景を撮ることはもうできない。

この数年、街中でアウンサンスーチー氏の写真はありふれた光景になってきた。だが依然、反政府ゲリラや難民、ムスリムなどの姿はまだまだ慎重を要する題材であった。

しかし幸運なことに、2012年8月末、事前検閲の制度がなくなった。その勢いもあつたのか、現地の大手出版社の幹部から「よし、君の写真集を出版しよう」とゴースサインが出たのだ。2013年2月、ヤンゴンの書店に写真集が並び、この国をよく知る人からは、「本当か、よく出版できたなあ」と驚かれた。私自身、この間の動きは、大変化だが、必ずしも「民主化」だとは思っていない。確かに、国内最大の都市ヤンゴンの変化は目を見張るものがある。だが、今でも地方を回ると、その変化が広がっているとは思えない。人々の生活や意識はそう簡単に変わらない。この国を歩き続け、肌で感じた経験がそう告げるのである。



今でも人口の7割が農業に従事する(シャン州、2005年)



昔ながらの鋳冶屋も現役で働く(ラカイン州、2010年)



シュエモドーパゴダを背景に朝日が昇る(バゴ地域、2005年)